

# FORUM

Vol.34

大阪府立大学  
高等教育開発センターニュース  
「フォーラム」

## 第 34 号

### CONTENTS

#### 巻頭言 ..... 2

特命副学長（地域連携・生涯学習担当）  
山本 章雄

#### コラム ..... 3

図書館の役割  
学術情報室長  
大前 富美

#### 授業報告 ..... 4

地域保健学域総合リハビリテーション学類 教授  
大関 知子

#### 学生FDスタッフ活動 ..... 5

#### 2017年度活動報告 ..... 6

#### 編集後記 ..... 8

# 巻頭言

● 特命副学長（地域連携・生涯学習担当）  
生涯学習推進室長・生涯教育センター長

山本 章雄

YAMAMOTO AKIO



## 山本 章雄

YAMAMOTO AKIO

特命副学長（地域連携・生涯学習担当） 生涯学習推進室長・生涯教育センター長

1952年兵庫県西宮市生まれ。東京教育大学体育学部卒。大阪女子大学助手、講師、助教授を経て、2002年大学院文学研究科教授。2005年大阪府立大学総合教育研究機構教授。2011年地域連研究機構教授、生涯教育センター長。2012年第4学群長、地域連携部門長。2017年特命副学長、高等教育推進機構教授。

## 地域志向教育への挑戦

大阪府立大学は、平成25年度に大阪市立大学と共同で文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）に採択されました。事業の名称は「大阪の再生・賦活と安全・安心の創生をめざす地域志向教育の実践」であり、地域再生CR（Community Regeneration）副専攻を学士課程に設置し、地域貢献に資する教育研究を行うことにより地域志向の学生を育成し、大学が地域の拠点としてその発展に寄与することを目指して、これまで5年間にわたりプログラムを推進しています。

副専攻は、必修（選択必修）科目8単位、選択科目10単位以上で構成されており、全学の1年次生から3年次生が主に履修できるようになっています。必修科目は、1年次生を対象とした「地域実践演習」「アゴラセミナーⅠA」、2年次生を対象とした「アゴラセミナーⅠB」、そして3年次生を対象とした「アゴラセミナーⅡ」の4科目であり、それぞれ複数のクラスや科目群を開設し、多くの学生が履修できるように、志向に応じて多様な課題に取り組めるように配慮がなされています。

1年次対象の「地域実践演習」「アゴラセミナーⅠA」では、地域がかかえる様々な課題の実態を直接知るため、地域に出かけたり、課題に取り組んでいる方々に話を聞いたりを中心に活動を行います。2年次の「アゴラセミナーⅠB」では、地域課題の理論的背景や課題解決のための問題点などの知識を習得するため、学識経験者や専門家などの講義を聴くことを中心に展開します。3年次の「アゴラセミナーⅡ」は仕上げるステップで、課題解決のプラン構築、プラン実現のためのプロセスマネジメントなどの実習を地域と協働で行っています。

一方今回の事業では、地域貢献に資

する研究により大学が地域の拠点となることも求められており、これを具現化するため研究推進機構に「COC研究所」を設置し、CRテーブル（自治体・NPO法人・地域住民の皆さんと課題解決に向けて協議する場）CRラボ（情報の収集、交換、蓄積、検討を行う学内連携の場）の機能を有機的に連携させ活動に取り組んでいます。また、CRテーブルに自治体から持ち込まれた課題をCRラボを介して副専攻授業「アゴラセミナーⅡ（地域活動演習）」に落とし込み、学生が直接現場の課題解決に応えるといった「生きた教育」としての実績もあがりつつあります。

このように実施されている地域志向教育の推進は、当然、受講学生の地域に対する意識の高揚、課題への理解深化、解決力の獲得という成果を着実に挙げていますが、これに留まらず、指導をいただく先生方の「教育におけるスキルアップ」という面においても効果をもたらしていると言えます。CR副専攻各科目の運営においては、どうしても教員・学生・地域の密接な絡み合いが必要となり、こうした協働作業の中では様々な事案が生起することとなります。大学という閉鎖された環境で教育活動を行うのではなく、地域というパブリックな環境で教育活動を行うこと、しかも生活に密着した厳しい地域課題に向き合うことは「教育の質的変容」が要請され、変容の多様性を活用することはスキルアップの可能性を飛躍的に拡大するものと考えられます。まさに「地域との協働」は高等教育開発の「宝の山」の一つと言えます。

公立大学法人として設置されている大阪府立大学は、地域をフィールドとし地域との連携を図りながら「教育・研究・社会貢献」のミッションを一体的に機能させてゆくことが、求められる姿ではないでしょうか。

# 図書館の役割

総合図書館中百舌鳥のロビーの一角に昨年開設された『資料展示コーナー historia』に1958年頃の図書館の写真がある。一見すると倉庫のようにも見える閲覧室の机で熱心に読書する学生の姿で、当時の図書館の雰囲気がかいまみえ興味深い。

私事で恐縮だが、この年度末に定年退職を迎える。大阪府立看護短期大学を皮切りに38年間、図書館で過ごしてきたが、この間、業務内容は大きく変わった。個人的な記憶をなぞることになるが、1980年代以降の図書館業務を振り返ることで、大学教育のなかで図書館に期待される役割について考える機会になればと思う。

1980年に最初に配属された大阪府立看護短期大学は、看護教育が「看護婦養成所」から「看護短大」へと比重を移しはじめた頃、1978年に開学し3年目だった。帝塚山の大阪女子大学旧学舎の教室（実験室？）を閲覧室と書庫に転用していた。当時業務は電算化前で、図書は目録カードをタイプ打ちで作成、書名・著者名・分類目録で管理運用、貸出はブラウン式（袋状の個人カードに図書カードをセットする貸出方法）だった。まだ国内で看護学分野の二次資料はなかったから、購読誌の掲載記事から索引を作成し利用に供していた。目録カードや記事索引の作成は資料を深く読み込む機会となり、学生へのレファレンスに役立った（記事索引は、その後日本看護協会図書室から『最新看護索引』（冊子版）が刊行されたため独自の作成は止めた）。少人数で、学生や教員との距離も近く、ニーズが何かわかりやすかったこと、それが更に相互のコミュニケーションを促し、次のサービスを産みだしていったように思う。

1993年の大阪府立看護大学・同医療技術短期大学部（7学科）開設以降は、一気に電算化、ネットワーク化が進んだ時期である。学術情報センター（現・国立情報学研究所）

が1986年に開設され目録所在情報サービスの運用を開始していた。このサービスは参加館が所蔵資料の書誌と所在情報をオンラインで分担入力し（NACSIS-CAT）、相互に利用に役立てるもの（NACSIS-ILL）であり、これにより業務効率と利用者サービスは劇的に向上した。また1990年代後半以降、インターネットが情報提供の形を変えていった。電子ジャーナル、データベースの普及である。当時勤務していた看護大学ではまず医中誌WebやCINAHL等のデータベースが導入され、それは間をおかずに電子ジャーナルアクセスへの要求へと繋がっていった。

2003年頃、某大手外国出版社の販促ポスターが印象に残っている。図書館員をターゲットにしたもので、研究者（地球物理学者や外科医等いくつかパターンがあった）の調査や手術室の場になぜか図書館員が立ち会っている、という絵だった。販促とわかっていても、図書館員の役割とは何か、とても刺激をうけたポスターだった。

2005年に学術情報センター図書館（現・総合図書館中百舌鳥）に異動後は、電子リソースの契約や利用のための教育を主に担当した。必修科目「情報基礎」での文献検索講義のほかに、「オンデマンド講習会」と称して要望に合わせた講習会を始めたのもこの頃からである。研究室に向かいの講習も懐かしく思い出される。

文部科学省は2013年の『大学図書館の機能・役割及び戦略的な位置づけ』において「学習支援」を筆頭に挙げ、その推進のために「図書館職員と教員との協働・連携が一層重視されなければならない」とした。時代が移り、情報環境が変わっても、図書館の役割は「人」と「資料」を結ぶことであり、その役割を果たすためには、「人」も「資料」もよく知ることが必要なことだと改めて実感する次第である。

大前 富美

OMAE FUMI

学術情報室長

1958年、山形県鶴岡市（現鶴岡市）生。（横綱「柏戸」の出身地）

大阪府立看護短期大学、大阪府立看護大学・同医療技術短期大学部、大阪府立大学学術情報センターの各図書館で勤務。2016年4月から現職。



## アクティブ・ラーニングの技法をとりいれた 管理栄養士必修科目 栄養教育論Ⅲ

大関 知子

(地域保健学域総合リハビリテーション学類 教授)

栄養療法学専攻は管理栄養士養成施設なので、教員配置・施設・設備、教育内容および単位数などは管理栄養士学校指定規則で定められている。卒業により栄養士免許が取得でき、実務経験なしで管理栄養士国家試験受験資格が得られる。

栄養教育論は国家試験の専門分野科目の一つで、健康・栄養状態、食行動、食環境などに関する情報の収集、評価・判定のための能力を養うこと、健康や生活の質向上につながる主体的な実践力を対象者が身につけることを支援するために必要な、健康・栄養教育の理論および方法を修得すること、ライフステージ・ライフスタイルに応じた栄養教育のあり方や方法を修得することを目的としている。

講義全体のまとめとなる栄養教育論Ⅲの中で、事例をもとに基礎理論や有効な技法について学生が考え、理解を深めることを目的として、高次能力学習型のアクティブ・ラーニングをとりいれた。事例は、いくつかの異なる特性を持つ対象に対する栄養教育に関する簡潔な記述である、過去の国家試験問題（基本的に5択問題）から抜粋した。

講義の最後2回を使って、各回、クラスを3グループに分けて事前に異なる5問ずつを指定して予習させる。その際、正答を解説するだけでなく、誤答についても、どのような選択肢であれば正答となりうるのかを説明できるように準備するとともに、自分で新たな選択肢と解答・解説を各問について1つずつ作成するよう指示した。授業当日はタブレットやスマホ使用は禁止とし、ノートや教科書、参考書などの紙媒体のみ使用可とした。これはインターネット上の解説を読んでも理解した気になってしまうことを防ぐためである。

講義開始約20分間で、同じ問について予習した学

生同士3～4名ずつで解説および自作の選択肢を互いに確認し、担当する問題に対する理解を深めさせる。その後、各グループから1名ずつで新たにグループを作り、それぞれが担当した問題についてピアティーチングを約60分間で行う。最後の約10分で教員が総括し、学生に理解度、疑問点と感想を書かせ提出させた。

最初のグループで担当する問題について学習し、新グループで知識を持ち寄るジグソー法を取り入れたことにより、各自が責任感を持って学び、さらに基本的なコミュニケーションのトレーニングが可能となった。

ただし予習や理解の程度、説明の仕方などの違いにより終了までの時間がグループによって大きく異なること、当日欠席者が出ることによりグループ人数に不均衡が生じることなど、授業の進め方について改善すべき点がある。

また評価については、現在は期末試験で理解度を評価するだけなので、今後はピアレビューを含めた評価方法もとりいれて、学生の気づきや能力向上を支援したいと考えている。





## 第13回教育改善学生交流i\*See2017 参加報告

学生FDスタッフ 溝口祐樹  
(工学研究科物質・化学系専攻)

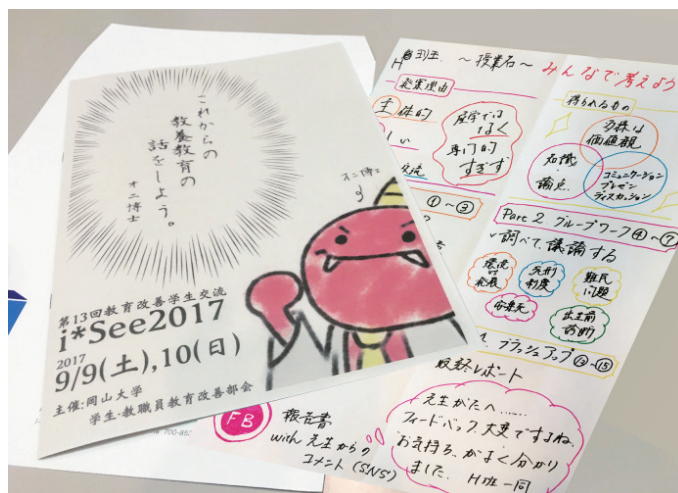
2017年9月9日、10日に岡山大学で行われた第13回教育改善学生交流 i\*See2017 に参加しました。この交流会は、大学の教育改善に関心を持つ大学生・教職員その他のための交流会であり、今回は12機関、61名(うち学生50名)が参加し、テーマである「これからの教養教育の話をしよう。」について議論しました。

議論の前半では、現状の教養教育についての不満をブレインストーミング形式で出し合いました。そのなかで、「取り扱いテーマが簡単すぎる、難しすぎる」「抽選制度があるため必ずしも受講したい講義を受講できない」「卒業するために必要な単位を修得するために、興味がない講義を受講する必要がある」「講義の目的が分からない、何に役立つのか分からない」などの意見が多く挙がりました。これらの意見については、各大学で共通しており、本学でも改善していく必要があると感じました。

議論の後半では、これらの不満を改善するための方法について、班に分かれて議論し、どのような講義をすべきなのかを考えました。私が参加した班では、不満を解決するために、教員から一方通行な知識の伝達のような受動的な学習ではなく、学生が自ら考え、答えのない問題に対するアプローチ方法を身につけることができる授業が必要であると考え、そのための講義形式について考えました。その中で、学生の能動的な学びにつなげるためには、グループワークを活用する方法が有効であるが、現在行われている調べた内容を発表するだけにならないようなテーマ設定、教員や学生同士による意見交換やコミュニケーション、教員からのフィードバックが重要と感じました。

今回の i\*See2017 に参加して、私たちと同じように学生FDスタッフとして大学の教育改善に取り組む学生と議論、交流することで、学生目線での教育改善の提案が重要であるということを確認することができました。興味深いことに各大学の学生が抱えている教養科目に関する不満点が共通であり、よりよい教育のためにはこれらの不満点の解決が必要不可欠であると感じました。今回の議論で取り扱った学生の能動的な学びの姿勢については、本学で行われている「初年次ゼミナール」においてすでに実践されています。しかし、教員からのフィードバックをさらに多くすることでよりよい講義になるのではないかと感じました。

また、講義の内容や難易度に関しては、様々な学域・学年の学生が同時に受講する教養科目では特に課題になる一方で、抽選制度があることから講義開始後の受講取り消しができません。そこで、学生FDスタッフでは、この課題を解決するための企画を議論し、提案することにしました。今後教職員の皆さんと協議し、企画を進めていきたいと思っています。



# 高等教育開発センター

## 2017年度活動報告

### セミナー・研修会等の実施

#### 高等教育開発センター主催セミナー・研修会等

セミナー・研修会	内 容	年 月 日
新任教員 FD研修	「データから見る府大生の特徴」 「授業を育てる」 ビデオ研修 「授業における ICTの活用について」 「教務に関する各種業務について」 (※2016年度より新任教員 FD研修の一部を、録画ビデオの視聴によるビデオ研修にしました。)	2017/4/4
FDセミナー 「大学教育再生加速プログラム」 (AP事業)	「大人数の講義型授業で学生を授業に巻き込むための工夫」 講師: 沖 裕貴氏 (立命館大学教育開発推進機構 教授)	2017/7/21
FDセミナー 「大学教育再生加速プログラム」 (AP事業)	「アンケートの実施と心理尺度作成の基礎」 講師: 畑野 快 (高等教育推進機構 准教授)	2017/8/30
新任教員向け研修 「授業デザイン研修Ⅰ」	・オープニング 挨拶: 前川 寛和 (テニユア・トラック推進会議議長 教授) ・アイスブレイキング ・ミニ講義 「本研修で目指す学習」 畑野 快 (高等教育推進機構 准教授) ・ミニ講義 「授業のフレームワークを作る」 星野 聡孝 (高等教育開発センター長・教授) ・ワーク 「ミニ授業の準備」「ミニ授業」 ・クロージング 挨拶: 星野 聡孝 (高等教育開発センター長・教授)	2018/2/22
AP合同フォーラム 「大学教育再生加速プログラム」 (AP事業) 合同開催: 関西大学・大阪市立大学	「第3期認証評価に向けて: 学生の成長に寄与する内部質保証システムの構築」 ・開催挨拶 関西大学 芝井 敬司 氏 (学長) ・趣旨説明 大阪府立大学 高橋 哲也 (副学長) ・基調講演 「認証評価の第3サイクルの概要と大学に求められること(仮)」 鈴木 典比古 氏 (国際教養大学 学長) ・事例報告 関西大学 : 紺田 広明 氏 (教育推進部 特別任命助教) 森 朋子 氏 (教育推進部 教授) 大阪府立大学: 畑野 快 (高等教育推進機構 准教授) 星野 聡孝 (高等教育推進機構 教授) 大阪市立大学: 橋本 文彦 氏 (特命副学長・経済学研究科 教授) 飯吉 弘子 氏 (大学教育研究センター 教授) ・パネルディスカッション ・閉会挨拶 大阪市立大学 井上 徹 氏 (教育・学生担当副学長 大学教育研究センター所長)	2018/2/26

#### 高等教育開発センター共催セミナー・研修会等

セミナー・研修会	内 容	年 月 日
工学FDセミナー 主催: 工学域・工学研究科 教育運営委員会	「工学教育でアクティブ・ラーニングを導入し、実践する上で必要なこと」 講師: 榊原 暢久 氏 (芝浦工業大学教育イノベーション推進センター/工学部 教授)	2017/9/19
SDワークショップ 「大学教育再生加速プログラム」 (AP事業) 共催: 総務部人事課	「IRと学修成果」 講師: 高橋 哲也 (副学長(教育・入試担当)・教育推進本部長・教授)	2017/9/20
国際交流フォーラム 主催: 国際・地域連携課	「“Student Mobility in ASEAN countries and the Role of AUN” ～アセアン諸国における学生移動と AUNの役割～ の開催について」 講師: Dr. Nantana Gajasen 氏 (アセアン大学連合(AUN) 前事務局長) 講師: 縄田 栄治 氏 (京都大学農学研究科長・農学部長・教授)	2017/11/14
高大接続改革講演会 主催: 教育推進本部	「『大学入試センター試験』が果たしてきた役割と『大学入学共通テスト』に期待される役割」 講師: 大塚 雄作 氏 (独立行政法人大学入試センター教授 副所長 試験・研究統括官)	2018/2/16

### 印刷物、メール発行

名 称	内 容	発行月
「フォーラム」第32号	巻頭言、コラム、授業報告、meaQs、FD セミナー報告、学生 FD スタッフ活動	2017/7
「フォーラム」第33号	巻頭言、コラム、九州工業大学とのセンター間協定について、FD セミナー報告、学生 FD スタッフ活動	2017/12
「フォーラム」第34号	巻頭言、コラム、授業報告、学生 FD スタッフ活動、2017 年度活動報告	2018/3
「ニュースメール」配信	センターの活動予定・報告、センターウェブページの紹介、FD・SD 関連研究集会等のお知らせなど	全3回配信

## 学習・教育支援サイト（ポートフォリオ）の運用

学習と教育の継続的自己改善などを支援するための「学習・教育支援サイト（ポートフォリオ）」の運用を行っています。学域生には、本サイトで半期毎に「半期学習目標」「授業ふり返り」「半期ふり返り」を入力してもらい、また学部生・院生には「授業ふり返り」を授業アンケートとして回答してもらっています。本サイトは、学生の学習ポートフォリオとしての役割を担うだけでなく、授業担当教員による授業分析や学生アドバイザーによる学生指導に役立てられるようになっています。

昨年度末に新システムへ移行してサイトをスマートフォン向けに最適化させたことなどにより、今年度は学生のサイト利用率が向上しました。また、「授業ふり返り」の入力率向上を目指し、質問項目の削減、未入力者へのクラス成績分布等非公開化などの新たな取り組みを行なった結果、昨年度と比べて入力率が大きく向上しました。このほか、本学で行っている学生調査の結果を個々の学生にフィードバックするしくみを学習・教育支援サイト上に整え、今年度末よりフィードバックを開始しました。

## 教学IRへの取組・学生調査の実施

### ・大学IRコンソーシアム

「大学IRコンソーシアム」は、平成21年度から23年度まで採択された文部科学省「戦略的大学連携支援プログラム—相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出—国公立4大学IRネットワーク」が発展したもので、平成29年12月現在本学を含む54大学が参加しています。また、平成24年度から28年度まで採択された大学間連携共同教育推進事業「教学評価体制（IRネットワーク）による学士課程教育の質保証（北海道大学・お茶の水女子大学・琉球大学・大阪府立大学・玉川大学・同志社大学・関西学院大学・甲南大学）」から事業承継し、学生調査・卒業生調査の実施等の取組を継続的に発展させ、わが国の高等教育機関での教学IRの基礎データの提供と分析を行うとともに質保証のための教学評価コミュニティを育成することを目標としています。

昨年度から本学は代表会員校を務めています。今年度は、2018年4月のコンソーシアム法人化（一般社団法人）に向けた手続きと、IRシステムのリブレース（2019年4月運用開始）に関する議論を進めています。また、IRシンポジウム「日本型大学IRの進化」—IRコミュニティを活用した質保証システムの構築—を開催し、共通調査に基づくベンチマークデータの活用事例を共有するとともに、当コンソーシアム以外のIRに関する連携組織である「EMI R勉強会」や「大学評価コンソーシアム」との意見交換も行いました。

### ・学生調査の実施

大学における教育の成果を測定することを目的として、学生調査を行い、学内の様々なデータと連携して分析し、質保証と教育の改善に結びつけることを目指しています。学生調査の結果（件数・集計）および、完成した分析報告書は、FDに関する全学委員会で報告するとともに、センターのウェブページに掲載しています（学内限定）。

今年度は、大学IRコンソーシアムの共通調査である一年生調査（10月～11月）に加え、卒業予定者アンケート（10月～1月）及び修了予定者アンケート（9月～3月）を実施しました。調査結果については教育改革専門委員会で報告し、学類ごとの集計結果を高等教育開発センターのウェブサイトで学内向けに公開しています。また、卒業後5年経過した方を対象として、卒業生調査を実施し、その結果も教育改革専門委員会で報告しました。

【詳細はこちらに掲載しています。】

大学IRコンソーシアム：<http://www.irnw.jp/>

## 「大学教育再生加速プログラム」（AP事業）の取組

本学は平成26年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」に複合型（テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」、テーマⅡ「学修成果の可視化」）で採択されています。今年度、事業期間が1年間延長されることになり、平成31年度まで補助を受け事業を進めることとなりました。

テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」では、共同知識構築システム（meaQs システム）の開発やタブレットPCの導入、反転授業用コンテンツの作成を支援するほか、FDセミナーやFDワークショップの開催によりアクティブ・ラーニングを推進します。また、「初年次ゼミナール」の成績評価にルーブリックを導入し、普及を図ります。加えて、ラーニングコモンズに学習支援を行うTA（コモンズTA）を配置し、学習環境の充実を図ります。

テーマⅡ「学修成果の可視化」では、各種学生調査（一年生調査、上級生調査、卒業・修了予定者アンケート）により学修成果を可視化し、その結果を教育改善活動へと活かしていきます。

今年度の取組みは以下の通りです。「アクティブ・ラーニング」に関しては、FDセミナーとして「大人数の講義型授業で学生を授業に巻き込むための工夫」、「アンケートの実施と心理尺度作成の基礎」、「工学教育でアクティブ・ラーニングを導入し、実践する上で必要なこと」を開催し、アクティブ・ラーニングの普及に努めました。「学修成果の可視化」に関しては、大阪市立大学、関西大学と連携し、「第3期認証評価に向けて：学生の成長に寄与する内部質保証システムの構築」をテーマとした合同フォーラムを開催しました。また、コモンズTAを対象とした研修会および前期振り返りミーティングを実施し、コモンズTAの育成に努めました。加えてSDワークショップ「IRと学修成果」を開催し、IRの意義を学内で共有する機会を提供しました。学生調査の結果をポートフォリオを使って学生個人にフィードバックしました。

【詳細はこちらに掲載しています。】

<http://www.ap.osakafu-u.ac.jp/>

## 学生FDスタッフ活動

本学では、平成24年10月より、教職員と協働で、教育改善について提案していただける学生を募集し、高等教育開発センターのスタッフとしての教育改善活動（FD活動）を始め、様々な企画を立ち上げ実施しています。

今年度は、6月に大学生生活の疑問や悩みを話し合う機会「しゃべり場」を開催し、スタッフ・関係者を含め、31名の学生が参加しました。8月と11月には、工学域機械系学類、生命環境科学域応用生命科学類の2学類で、学生課程相談会を開催しました（1年生の参加者は合わせて約70名）。本企画は、課程配属を控えた1年生を対象に、各課程の上級生から生の声を聞いてもらうことで、課程配属の際に役立ててもらおうというものです。

また、9月には「第13回教育改善学生交流会i\*see2017」にも参加しました。

これらの取組みに加え、自己紹介企画を実施し、学生FDスタッフ内で相互理解を深めました。また、教職員や卒業・修了を控えた上級生へのインタビューを行い、公開することで学生生活に資する情報提供の準備を進めています。

## 編集後記

巻頭言、コラム、授業報告等をご執筆頂いた方々に御礼申し上げます。例年、編集作業のスケジュールの都合により、原稿の執筆依頼を12月中旬に行い、締め切りを正月休み明けとしています。今年もお忙しい時期に、原稿作成頂きありがとうございました。

センターが主催・共催するセミナー等については、今後も「フォーラム」を通じて広報していきます。テニユア・トラック教員研修プログラムの試行として2月に実施した「授業デザイン研修Ⅰ」等についても、来年度に報告したいと思います。(高根)

### 大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース「フォーラム」

平成30年3月31日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学  
高等教育推進機構 高等教育開発センター  
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1  
<http://www.fd-center.osakafu-u.ac.jp/>  
印刷所 くすの木印刷  
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

<編集委員> 新井 隆景(副センター長) 小泉 望 小島 篤博 高根 雅啓 高橋 哲也 谷口 栄一 塚本 民雄 畑野 快 林 利治  
深野 政之(主任) 星野 聡孝(センター長) 水鳥 能伸 森岡 次郎 山崎 正純  
<事務担当> 古谷 智美 長尾智香子 藤岡 真弓